

氏名・(本籍地)	郡嶋昭示(千葉県)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第49号
学位授与の日付	平成20年3月15日
学位論文題目	<b>聖光の浄土教思想</b> —『浄土宗要集』を中心として—
論文審査委員	主査 廣川 堯 敬 副査 小澤 憲 珠 副査 金子 寛 哉

## 郡嶋昭示氏 学位請求論文審査報告書

### 「聖光の浄土教思想 —『浄土宗要集』を中心として—」

#### 論文の内容の要旨

##### 【はじめに】

本論文は大正大学大学院研究生 郡嶋昭示氏が「聖光の浄土教思想—『浄土宗要集』を中心として—」と題し学位請求論文として提出したものであり、浄土宗第二祖聖光の著作である『浄土宗要集』(以下、『西宗要』と略称)の説示を中心として、聖光浄土教思想の特色とその成立背景を解明することを目的としたものである。

##### 【本論文の構成】

浄土宗第二祖にあたる聖光は浄土宗を開いた法然の教義と信仰を継承した人物であると同時に、法然滅後に様々な浄土教理解が提示される中であって、法然浄土教の真意を明確に主張すべく多数の著作を残している。浄土宗史の上でも、また中世仏教の世界という視点から見ても、この聖光という人物は実に重要な位置にありながらも、従来の研究ではその歴史的側面が大きく取り上げられるのみで、教義体系の全体像に関しては未整理な状況であった。郡嶋氏は学部・大学院時代を通じて聖光の著作の研究に取り組み、近年は特に聖光晩年の著作である『浄土宗要集』に関する詳細な研究を発表している。本論文は郡嶋氏がこれまで発表した諸論稿をもとに整理を進めた論考であり、目次は以下の通りである。

##### 序論

- 一 研究史の概観
- 二 研究の方法
- 三 本論の概要

##### 第一章 『西宗要』成立の背景

## 第一節 聖光当時の地域的環境—九州北部を中心に—

第一項 先学の研究と問題の所在

第二項 社会的状況—太宰府系諸寺の影響—

第三項 本州との交通

第四項 九州地方の浄土教信仰

## 第二節 聖光の修学背景

第一項 聖光の天台修学に関する記録

第二項 観叡と証真

第三項 平安末・鎌倉初期の叡山

## 第二章 『西宗要』の概要

### 第一節 聖光の著作と『西宗要』

第一項 聖光の著作

第二項 著作中における『西宗要』の位置

### 第二節 書誌的整理

第一項 題号について

第二項 写本・刊本について

第三項 天保版について

第四項 注釈書

### 第三節 『西宗要』に記載される列席者の説示

第一項 良忠の発言

第二項 良忠以外の列席者の発言

第三項 『西宗要』講説時の列席者について

### 第四節 『西宗要』の構成

第一項 説示される内容とその特色

第二項 引用文献の概観

## 第三章 聖光浄土教思想の基盤

### 第一節 釈尊観

第一項 問題の所在

第二項 『法華経』と仏出世本懐論

第三項 法然の説示

第四項 聖光の仏出世本懐論

### 第二節 教判論

第一項 問題の所在

第二項 法然の教判理解

第三項 聖光の教判理解

第四項 聖光独自の主張

### 第三節 仏身仏土論

第一項 問題の所在

第二項 法然の仏身仏土論

第三項 聖光の仏土論

第四項 聖光の仏身論

#### 第四節 機根論

第一項 問題の所在

第二項 聖光が伝えた「三学非器」の思想

第三項 聖光と「三学非器」

### 第四章 『西宗要』に見る聖光独自の教学

#### 第一節 専修念仏と臨終行儀の主張—異説への対応から—

第一項 問題の所在

第二項 専修念仏の主張

第三項 臨終行儀の主張

第四項 臨終行儀の主張と聖光の事跡

#### 第二節 疑心と往生について

第一項 問題の所在

第二項 他の門弟の説示

第三項 聖光の辺地往生説

#### 第三節 諸行往生説

第一項 問題の所在

第二項 聖光の諸行往生説に関する先学の賛否

第三項 第十九願所説の「修諸功德」の理解

第四項 念仏三昧と禪波羅蜜

第五項 菩薩の総別二願

第六項 『西宗要』以後の著作における六度と念仏

#### 第四節 聖光の本願理解

第一項 問題の所在

第二項 聖光の第十八・十九願理解

第三項 聖光の第三・二十一願理解

第四項 聖光の本願観の特色

#### 第五節 聖光の天台観と聖道門の廃捨

第一項 問題の所在

第二項 天台関係文献の引用例

第三項 天台の廃捨—聖道門としての天台—

#### 総結

#### 【確証の概要】

序論では浄土教研究の分野において、これまで余り研究が行われてこなかった聖光の浄土教思想について、まず丁寧に先行研究の整理と分析を行った上で、聖光の時代背景を中世の九州北部に求める必要がある

ること、聖光の著作を通読して俯瞰的に取り扱うことによって『浄土宗要集』（以下、通例に習い『西宗要』と呼称）という著作の性格が把握し得るという独自の的方法論を提示している。

第一章『『西宗要』成立の背景』では、第一節「聖光当時の地域的環境—九州北部を中心に—」で聖光が活躍した九州北部の荘園状況について、第二節「聖光の修学背景」で天台教学を修学した比叡山の聖光当時の状況について整理を進めている。特に第一節の内容は、歴史学では大きく研究が進んでいる中世荘園論に着目し、九州北部の荘園論を整理することで、聖光当時の九州北部は太宰府系諸寺の寺領が大半を占め叡山の力が及ばない地域であったことを指摘している点などは実に興味深い。

第二章『『西宗要』の概要』では、『西宗要』の書誌的な特色と問題点の指摘、写本・版本・注釈書といった基本事項の整理を行ない、併せて聖光の諸著作中において本書が後期の執筆であり、かつ本書のみにしか記載されない種々の重要な教義上の問題があることを指摘している。また引用文献に関しても整理を行ない、聖光が当時伝来されたばかりの文献に対してどのような対応を行なっているかということも指摘している。従来の聖光研究では『西宗要』の内容について踏み込んだ論者が数少ないが、このように『西宗要』そのものに関して引用文献の分析などの基礎作業を通じて解明しようとする方法は、本論文が初めてである。

第三章「聖光浄土教思想の基盤」では、聖光浄土教の源流であり、また基盤ともいうべき法然浄土教をどのように受容し継承しているかということについて、釈尊観・教判論・仏身仏土論・機根論を取り上げて論じている。特に法然が自ら機根観を如実に語った「三学非器」という法語について、他の法然門下の中にはこの言葉が見当たらず、ただ聖光のみがこの言葉を重要視しつつ機根論を提示しているという指摘は筆者の卓見であろう。このように各門下における法然浄土教の受容という視点は、従来の研究もこの点に留意していることは見ることができるが、各門下の著作が多数あることから具体的な成果はこれまで見られなかった。

第四章『『西宗要』に見る聖光独自の教学』では、聖光の浄土教思想の独自性を五節にわたってまとめている。第一節「専修念仏と臨終行儀の主張—異説への対応から—」では、聖光が往生行として専修念仏を修すべきことと、併せて臨終行儀の必要性を主張していることを指摘している。第二節「疑心と往生について」では疑心を抱くことを厳しく制する姿勢が聖光教学の特色であることを指摘している。またこのような態度が門弟の中でも聖光だけであることから、門弟間の聖光の特色を論じている。第三節「諸行往生説」では、先学によって指摘される聖光の諸行往生説に関する再考を通じて、聖光の諸行往生説は第十九願理解においてのみ成立するのであり、ここに聖光の独自性が見られることを指摘し、その他の例では聖光は往生行として諸行を説示していないことを合わせて論じている。第四節「聖光の本願理解」では、聖光が法然から継承した仏身論と、本願のうえで極楽の往生人に関する誓願を中心に極楽の様相を論じ、往生人が有相を現ずることを主張した聖光の本願観が影響しているという点を指摘している。第五節「聖光の天台観と聖道門の廃捨」では、聖光が諸々の教義を論じる際に、五時や四教といった天台で用いられる教義を各所で援用していることを指摘し、かつこのような論述は、法然が確立した浄土門を天台の教義に引き戻すための作業ではなく、『西宗要』の講説に列席した者に対して効果的な論法を用いたために説くに至ったものであることを指摘している。

総結では以上の論述を踏まえた上で、聖光は講義の席上では天台宗の教義を意識しつつも、自らの浄土教の教義体系の根幹は常に法然浄土教に求め、法然浄土教が提示する凡夫往生説を主張していたということ指摘している。

以上が各章の概要である。

## 審査結果の要旨

### 【本論文の評価】

さて、本論文の評価すべき点であるが、まず取り上げなければならないのは、このように聖光の主著ともいべき『西宗要』に関して、その全体を的確に把握した上で、個々の教義上の問題点に対応しつつ、個々の問題点の背景にある聖光自身の思想形成にまで踏み込んだ点にある。このような研究はこれまで見られなかったものである。従来の聖光研究は浄土宗の伝書として珍重されている『末代念仏授手印』と聖光が積極的に自説を主張している『徹選択集』巻下が中心であった。本論文では先行研究を丁寧に精査した上で、従来の研究では余り取り上げられていない『西宗要』という聖光が浄土宗を取り巻く外的環境を考慮しつつ作成した著作に着目し、その四章にわたって全体像を紹介している。

具体的には、第一章『西宗要』成立の背景』の論述で、九州北部を中心とした天台宗や浄土宗諸派の動向にも注意しつつ、併せて莊園論を参照し、人的交流と経済的環境を念頭に置いた聖光浄土教の位置付けを試みた点などは今後中世仏教研究に不可欠な視野と方法であり、高く評価すべき点である。

また第二章第二節「書誌的整理」で論述しているように、『西宗要』について入手可能な写本と版本の諸本をすべて校合し、その上で現在最も閲覧しやすい浄土宗全書本が良忠の所説箇所に関して意図的に校訂を施しているという指摘などは、今後の『西宗要』研究に大きな意義を有するものである。さらに第二章第四節『西宗要』の構成』で行なっている聖光の全著作の概観という作業は、決して短時間で可能なものではなく丁寧な基礎作業が必要な内容であり、今後の聖光浄土教の研究にとってその教義的な全体像をより明確に把握するためには不可避な作業である。

第二章第三節で『西宗要』講説時の列席者を「有人云」の「有人」に比定していることは、一つの着眼点として評価することができる。ただ、問答体の論述が当時の教義書の論述形式であるとすれば、「有人」とは必ずしも講説時の列席者に限定する必要はなかろう。具体的に言えば、「有人」の中に含まれるのは、聖光が『末代念仏授手印』で異義者として列挙した、一念義・西山義・常寂光土義等であって、この三種の異義者と、聖光はいつ、どこで接点を持ったのか具体的に追求する必要があるだろう。

第三章第四節で法然からの相伝として「三学非器」に注目している点は評価することができる。ただ、ともに人間の性にかかわるものであるが、「三学非器」とは法然の立教開宗以前の、菩薩道の実践の上の自覚であるのに対して、「信機」とは開宗以後、三心具足の念仏生活の中で、阿弥陀仏の光明に照らし出される宗教体験上の自覚である。両者ははっきりと区別されるべきである。

第四章第一節で臨終行儀を強調する背景には第十九願の理解があるというが、それではなぜ法然の臨終行儀観と異なるのであろうか。第十八願・第十九願・第二十願の三願が四十八願中、とくに重要視され、そのうち第十九願について、法然以前・法然・法然以後とに分けて、深く広く論究する必要があるだろう。

第四章第四節で四十八願中の第十八願・第十九願・第二十願の三願についての研究を積み重ねる必要がある。他人の研究にまかせるのは危険である。

### 【本論文の課題】

このように種々、評価すべき点がある一方、やはり今後の課題というべき点もある。

まず莊園論についてであるが、今後は法然ならびに法然門下個々に直接関わる莊園ならびにその莊園領

主を精査し、法然門下それぞれがどのような経済圏の中で活動していたかという実態を把握した上で、聖光が九州を活躍の場として選んだ理由などを考える必要があると思われる。

次に教義に関する点であるが、聖光の浄土教思想と言いながらも、『西宗要』以外の著作に論究が及ばなかった。とくに第四章第三節諸行往生説は『徹選択集』を抜きにしては、その論究が不十分となろう。

さらに重要なことは、第三章、第四章において鎌倉浄土教（法然門下）全体への視野のひろがりがなかったことである。個々の教学上の問題は鎌倉浄土教における共通の課題として論究されるべきである。

### 【結語】

このように種々の将来的な課題は有するものの、本論文は従来の聖光研究とは方法論的にも結論的にも大きく一線を画しつつ中世浄土教研究史に新時代の到来を期待させるものであり、聖光浄土教の独自性を明確に提示した貴重な研究成果として高く評価し得るものである。よって、ここに本論文が博士（甲種・仏教学）に十分に値するものと判断し、学位に相当するものと認定できる。